

対話における逸脱文のパターンと発話解釈について

吉田悦子

三重大学人文学部

tantan@human.mie-u.ac.jp

1. はじめに

対話参加者の相互作用により談話構築がなされる対話では、通常の文の定義から逸脱した形式の発話が多数観察される。こうした発話は伝統的な文法や機能分析からは予測出来ない発話解釈を生むことがある。日本語における文頭の名詞句省略と助詞「は」を含む応答に見られる発話形式は、話順交替への関与を示唆している。一方、英語における帰結節をもたない条件節の生起は聞き手への丁寧な命令として機能するなど、語用論的な解釈が求められる。こうした言語パターンから、どのようなプロセスを経て発話解釈が導かれるのかについて対話コーパスの分析を通して、考察を加えたい。

2. 文の定義と発話

話しことばにおける基本単位は発話という単位であり、形式的な定義をめぐって議論の多い文や節とは区別して認識されることが多い。書きことばの「文」と区別するために、多くの研究者は話しことば独特の特徴をとらえた発話の定義をこれまでおこなっており(Quirk *et al.* 1985, Chafe and Danielwicz 1987, Brown and Yule 1983), 発話単位という用語も定着している(Grosz and Sidner 1986)。また、機能的にも文の代わりに節を基本単位として記述する方法(Halliday 1985, 寺村 1981)も既に一般的であり、ポーズの長さを規定して発話単位を切り取るというやり方を採用することで対話者間の話順交替の手がかりや談話の構成をとらえ、対話という実態を明らかにすることも可能となっている(堀内その他 1999)。

自然な対話のやりとりの中に現れる節の連鎖は、形式的なアプローチによる文法では扱えないため、分析の対象からはずされるか、もっぱら言語運用における逸脱的な発話として取り扱われてきた。しかし、岩崎・大野(1999: 141)の指摘にあるように、「文」が会話のなかである規準にしたがって形成されていくのならば、それは言語使用者のもつ言語知識の一部であり、その規準の理解を深めることは言語学のひとつの役割である」という考えに集約する

ことができるのではないか。本稿ではこの視点に基づき、相互作用の結果、逸脱文ととらえられる発話の形式を「節の連鎖」あるいは「不完全な文の連なり」(丸山 1996)ととらえ、談話構築の重要なパターンとして位置づける。

本稿では、こうした「節の連鎖」について、日英語の対話コーパスを基に、談話に新しい要素を導入する場面と関連づけて議論する。

本稿の構成は、以下の通りである：日本語における文頭の「は(wa)」で始まる発話(3節)、英語における主節をもたないif節で始まる発話(4節)、相互作用の構造性と発話解釈(5節)の順序でおこなう。

3. 日本語における文頭の「は(wa)」で始まる発話

対話における節の連鎖には、さまざまなつながりが認められるが、本稿では、岩崎・大野(1999)にしたがい、この形式を「両属連鎖」と呼んでいる「ある要素が二つの文においてまたがって使われる現象」として定義することにする。

この「両属連鎖」は、関与する発話者が一人か、複数かによって二つのパターンに分けられる。同一の発話者が一度発話を中断したあと、再びもとの発話を継続する発話を産出する場合の多くは、相手の対話者からのあいづち(back-channels)をはさんで起こる。文頭の助詞は、「は」「が」「を」「に」などが用いられる(M: 六時半やったやんな H: うん M: にたどりついてなかったら[林 2005])。このタイプを同一話者による「両属連鎖」と呼ぶことにする。

「両属連鎖」のもうひとつのタイプは最初の発話者が発話した未完了の発話に続いて、すぐに相手の対話者が応答的に発話を続ける場合である(A: ウチの大学表向きはよさそうにみえるけど、そろそろ危ないねん。留学生の質もさがってるし・・・B: は--、どこの大学にもあるけどね。[有田 2006])。同一の発話と異なり、文頭の助詞は「は」が最も顕著であり、話順交替への関与を示唆している。この助詞は「提題助詞」とよばれるものと同様であるが、有田(2006)はこうした文頭の「は」を「応答詞」としての機能

を果たすものとしてとらえている。以下、文頭の「は」で始まる発話に焦点をあて、このタイプを複数話者による「両属連鎖」と呼ぶことにする。とりわけ、日本語において「両属連鎖」が二人の話し手によって担われる場合は、談話に新しい要素を導入するという機能的な働きがある。

一方、英語でこれら二つのタイプに相当するものについては、Clark and Wilkes-Gibbs(1996)が談話のなかに最初に導入される名詞句のパターンとしてあげている‘initial presentation’と呼ばれる6種類の名詞句のタイプを参照しておきたい。名詞句を節にまで拡張してとらえれば、このうちの2つのタイプが同様の形式を備えている。

同一話者による「両属連鎖」は、彼らによると‘Installment Noun Phrase’に相当する。同一話者の発話の間に相手話者のあいづちを含んでいる部分も共通する。イタリック部分が連鎖している名詞句である(e.g. A: And the next one is *the one with the triangle to the right* ... B: Okay. A: *With the square connected to it.*)。

複数話者による「両属連鎖」は、彼らによると‘Proxy Noun Phrase’に相当する(e.g. A: And *number 12 is uh, ...* B: *Chair.*)。Bの発話はAのやや長いポーズを経て産出されるとコメントされているところから、Bが話順交替により会話の継続に貢献していると考えられる。

日本語の地図課題対話コーパスから、これに類する例を見てみよう。¹

(1)

G:まず

G:そのたてもの

G:をめぐしてすすみますがそのたてものの

G:にしがわをとおっ<230>てなんかしてください

G:のまのところまでなんかしてください

F:えと

F:くるま

G:は<270>みなみにみえますか

F:はありません

F:きたにありますけど

F:だいぶはなれてます

(file: ab)

ここでは、有田(2006:2)によって区別されている協調型対話にあらわれるタイプ2(G:は<270>みなみにみえますか)と働きかけ型対話の応答の文頭部分にあらわれるタイプ3(F:はありません)が連続して現れている。

最初の「は」は、対話者が自発的に提題助詞を用いて後続する疑問文を産出しており、この疑問文に対して、対話者Fは提題助詞「は」を応答の文頭に用いている。この助詞により、応答詞としての役割を担っているという分析が可能になる。

後者の「は」については、さらに砂川(2005)が指摘する「焦点提示機能」とのかかわりから新しい情報の付加として分析することが可能である。続いて対話者Fは、後続の発話において主語と提題助詞「は」の省略により、「くるま」という談話要素を主題として談話内に確立させている。

同様に、新しい談話要素の導入が対話者の相互作用によって節の連鎖を結びつけている例をあげる。

(2)

G:なにかちょっと

G:なんだろ

F:がけ*みたいなやつ

G: *そがけみたいな

F:*があ

G:*ちょっとはいありますか

F:はい

G:はい

(file: dc)

ここで助詞「が」は、談話要素を導入する名詞句(F:がけ*みたいなやつ; G: *そがけみたいな)の節への連鎖を促し、後続の節(G:*ちょっとはいありますか)に続いている。日本語において、助詞が連結詞として働くと同時に話順交替を促し、帰結節を結びつける役割があることがわかる(林2005)。

4. 英語における主節をもたない if 条件節で始まる発話

3で観察されるように、提題助詞としての働きをもつ「は」やその省略形、および主語を明示する「が」によって導かれる新しい談話要素を参与者同士で同定することで、参与者は情報を共有することができる。日本語の場合、砂川(2005)が指摘する焦点提示機能をもつ「は」分裂文、いわゆるコンピュータ文の構文により新しい要素の導入や同定が対話参与者に

¹ コーパスにおける発話単位は「自己発話内の400ミリ秒以上の無音区間によって区切られた音声的連続」の定義を採用する(堀内他:1997)。詳細は吉田(2002)を参照。

よって用いられることを見た。一方、同様の環境で談話要素を導入する場合でも言語によって、談話要素と構文のパターンの結びつきは異なる。ここで英語の場合について考察してみたい。

ひとつのケーススタディとして、本稿では if 節による談話要素の導入のパターンと機能に注目してみる。書きことばに見られる if 条件節を含む構文形式は、「従属節 (if 節) + 主節」(タイプ 1 : T1) あるいは「主節 + 従属節 (if 節)」(タイプ 2 : T2) のどちらかであるが、話しことばでは if 条件節が独立した形式として発話される場合 (タイプ 3 : T3) が散見される。これは、形式上、主節の欠けた逸脱文とみなされるが、対話においては独特の機能を持ち、穏やかな指示・命令表現として解釈される (Miller and Weinert 1999)。以下に典型的な例を示す。

(3)

*TA 78: Well, are you able {a t}... If you bring your line up the right hand side, and bring it round and over.

*TB 79: < Those funny objects, sort of buildings, /

*TA 80: Yeah, up over the top of it.

*TB 81: ruins, things. >

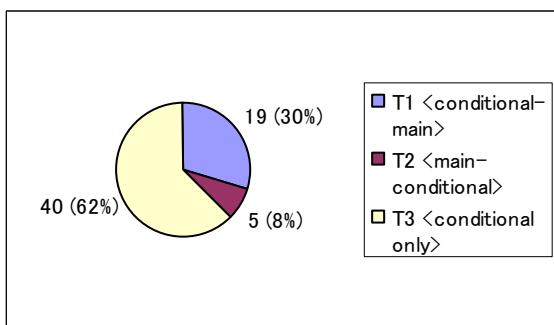
*TA 82: Right.

(Lleq4c2)

ここでは、情報提供者 (TA78) の指示に応じて、情報追従者 (TB79, 81) は新しい談話要素を導入している。主節部分は未完であるが、対話者双方にとっては過不足ない情報の共有が可能になっている。

以下に示されるように、if 節の全用例 64 例中、こうした独立型の T3 が 40 例を占めており、この割合は全体の 62%にあたる。

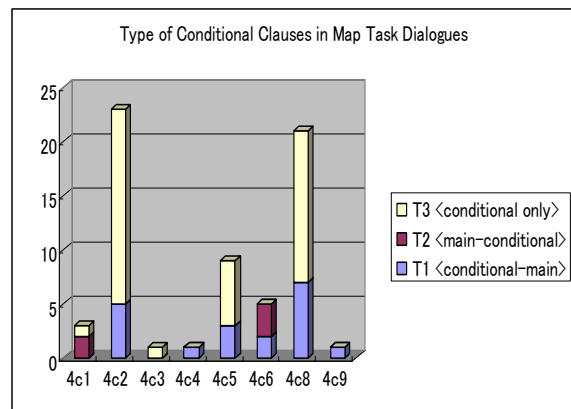
[8 対話における if 節のタイプ別の割合]



この結果を、Miller and Weinert(1999)の先行研究と比

較すると、全体の if 条件節のうち 72%を占めるのがこの T3 であることが報告されている。² (3)において、一見、中断されるように思える if 節は、相手の対話者からのあいづちを伴い、新しい談話要素の導入を伴う傾向があることから、聞き手の話順交替を許すと共に、談話を先に進める構文形式であるといえる。また、Biber et al. (1999)がこうした節の機能を 'cohesive function' と指摘しているように、新たな話題の転換を示唆する指標として、前後の発話の橋渡しを担っているといえる。

しかしながら、この T3 がすべての発話コーパスの典型というわけでは必ずしもないことを考慮すると、このタイプはむしろ対話者間の関係性を反映する手がかりとしての言語現象ととらえたほうがよい。以下に示すように、8つの対話のうち、5つの対話においては if 節それ自体が用いられている頻度は5例以下である。



参与者条件との関係で、対話者同士の親近性の有無を指標としているため、親近性がある場合には if 節の使用は極端に少なくなっている。反対に、親近性のない対話者 (とりわけ情報提供者) は、より丁寧さの発話解釈を導く表現によって指示をおこなう傾向がある。つまり、この T3 の指示命令表現は、とくに丁寧さに配慮している表現といえる。この If 節が談話要素の導入の橋渡しにならない場合は、それ以外の構文、たとえば、陳述文や疑問文が多用されている。しかしながら、ここで共通しているのは、相手への働きかけや応答への期待によって対話者間での相互作用性に貢献している点であろう。

² 使用しているデータは、エジンバラ大学で編纂された英語のオリジナル版の地図課題対話コーパスである。

5. 相互作用の構造性と発話解釈

ここまで、日本語の応答詞あるいは提題助詞としての役割を担う主題の「は」と英語の if 条件節が談話構築において果たす語用論的な役割を考察してきた。この節では、こうした言語形式と談話における相互作用の構造性とのかかわりを示唆したい。地図課題対話のような課題遂行型の対話においては、対話者にとって新しく導入された要素を同定することがまず最初の課題となる。導入される談話要素である名詞句を談話内に定着させるために常に発話理解を促すシグナルを話し手は聞き手に対して出しており、聞き手もそれに応じて自ら話順交替によって節の連鎖を補充していく。こうした双方の相互作用性によって不完全な部分を埋め合わせて談話を構築している。たとえば、例(1)に見られるように聞き手が発話を完結してしまう「先取り発話」や話し手が文を完結する前に聞き手がおこなう「先取りあいづち」は日英共通に見られる現象である。一方で、話し手もこうした聞き手の発話行為に基づいて話題の方向性を模索する。対話者は共に話し手聞き手として談話構築という共同作業に携わっている。例(2)と(3)は、新しい談話要素の導入というプロセスと節の連鎖という現象が現れている。林(2005)は、二つのアクティビティ：名詞表現確立のためのサイド・アクティビティと句構造から節構造へと橋渡しされるメイン・アクティビティ、により、こうした相互作用の分業が行われていると指摘する。この現象は言語構造の違いはあれ、言語に共通する相互作用的な現象であり、発話解釈に影響を与えているのである。

6. まとめ

日本語では、対話者同士が名詞表現を確立するために助詞を多用し、とくに「は」は主題マーカーとしてだけでなく、節の連鎖を促し、話順交替のきっかけになっている応答詞としての役割もあることがわかった。英語でも同様に名詞表現の導入と同定の段階で活発なやりとりの連鎖が産出され、条件節による談話要素の導入が聞き手の同定を予測していることを見てきた。こうした節の連鎖パターンは、特定の言語形式と発話者間の相互作用の構造性との間の密接な関係を示唆している。本稿ではこの部分に踏み込むことはできなかったが、相互作用の構造性が発話解釈に与える影響を明らかにすることを今後の課題としたい。

参考文献

- 有田節子(2006)「対話における文頭の『は (wa)』」の機能について』『日本語用論学会第8回大会発表論文集』創刊号(2005) 1-8.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex: Pearson Education.
- Brown, G., and Yule, G. (1983), *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. and D. Wilkes-Gibbs. (1986) 'Referring as a collaborative process' *Cognition* Vol. 22. 1-39.
- Chafe, W. and Danielewicz. (1987) 'Properties of written and spoken language', in R. Horowitz and S.J. Samuels (eds.), *Comprehending Oral and Written Language* (New York: Academic Press), 83-113.
- Grosz, B.J. and Sidner, C.L. (1986) 'Attentions, intentions, and the structure of discourse', *Computational Linguistics*, 12(3): 175-204.
- Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar* (London: Edward Arnold)
- 林 誠 (2005) 『文』 内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって--』串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『活動としての文と発話』ひつじ書房 1-26.
- 堀内靖雄,中野有紀子,小磯花絵,石崎雅人,鈴木浩之,岡田美智男,仲真紀子,土屋俊,市川薫(1993)「日本語地図課題対話コーパスの設計と特徴」『人工知能学会誌』Vol.14, No.2, 63-73.
- 岩崎勝一・大野剛 (1999) 「『文』再考—会話における『文』の特徴と日本語教育への提案」『言語学と日本語教育—実用的言語理論の構築を目指して』くろしお出版
- 丸山直子 (1996) 「話しことばにおける文」『日本語学』15巻 明治書院 50-59.
- Miller, J. and R. Weinert. (1998) *Spontaneous Spoken Language*. Oxford: Clarendon Press.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* London: Longman.
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法 (下)』国立国語研究所
- 吉田悦子(2002)「日本語名称なし地図課題対話コーパスの概要と転記テキストの作成：報告」『人文論叢』第19号. 241-249.